

## 持続可能性について考えさせる旅を終えて

ヴィラグ ヴィクトル  
Virág Viktor

長崎国際大学人間社会学部社会福祉学科講師  
2013 年度奨学生

5 月末に渥美国際交流財団の「博士号取得者の海外学会派遣プログラム」の一環として、国際ソーシャルワーカー連盟ヨーロッパ支部が主催する国際会議に参加した。開催都市はレイキャヴィクで、アイスランド・ソーシャルワーカー協会が共催となっており、実施団体の役割を果たした。なお、本学会に先立って、経由国のフィンランドの北極圏地域において、自身の発表テーマ「歴史的な背景と現代日本における先住民アイヌの周縁化 — 植民地化と同化政策による社会の変化」と関連して、欧州北方先住民民族サーミについて調査を行った。

本稿では、フィンランドの調査とアイスランドの学会を通じて感じたことをまとめている。この旅を一つのキーワードでまとめるとしたら、自分の中では間違いなく「持続可能性」になる。フィンランドでは、先住民民族が調査対象であったため、どちらかといえば、自然環境との持続可能な付き合い方について考えさせられた。また、アイスランドの学会では、この狭義の捉え方に社会保障制度等の社会経済的な持続可能性の文脈がさらに加わった。

まず、フィンランドの北極線沿いのロヴァニエミでは、同じく北方先住民民族であるアイヌとの比較研究に向けて、EU 最北の大学にあたるラップランド大学の社会科学部ソーシャルワーク学科を訪問し、当事者ワーカー及び研究員を含めて、サーミの社会福祉とソーシャルワークの全体像について学んだ。北極博物館「アルクティクム」に

おける情報収集の後、さらに北方に移動し、イナリ湖周辺では、国立サーミ博物館「シーダ」とサーミ文化センター「サヨス」における情報収集に加え、サーミ自治議会「サーメディッギ」にて聞き取り調査を実施した。

サーミの伝統的な生活様式について学んで、日本のアイヌを含めた世界中の先住民民族と同様に、気候と地形に極めてよく合う循環型生活という印象を強く受けた。その象徴は季節の変化に応じて移動する放牧を中心としたトナカイの飼育である。サーミのこのような伝統的な生き方は、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアによる植民地化と近代化に伴う産業化等によって徐々に変化してきており、現在においては鉱業、観光業、林業などの経済活動と地球温暖化に脅かされている。なお、伝統的な土地及び資源利用に代わるこれらの新しい産業は必ずしも循環型ではないため、長期的なスパンで持続不可能性の問題が生じる。

フィンランドの調査を終えて、レイキャヴィクに向かった。滞在中にアイスランド大学社会科学部ソーシャルワーク学科を視察する機会もあったが、時間の大半を国際会議場で過ごした。大会テーマは「変化する社会における周縁化 (marginalization) とソーシャルワーク」で、アイスランド大統領と社会平等大臣の開会挨拶からは、他国の政治家にはあまり見受けられない排除等の社会問題やソーシャルワーク自体に対

する深い理解が伝わった。

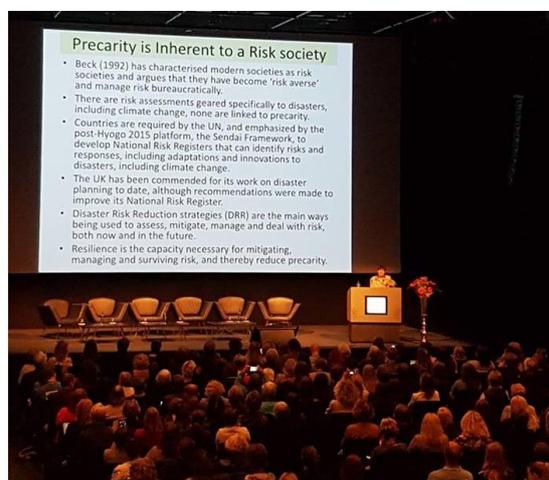


(左から)アイスランド大統領、国際ソーシャルワーカー連盟事務局長、アイスランド社会平等大臣、アイスランド・ソーシャルワーカー協会会長、国際ソーシャルワーク連盟ヨーロッパ地域会長

「持続可能性」のテーマは本学会中にも様々な形で浮上した。世界中のソーシャルワーク専門職が掲げているグローバル・アジェンダにおいて、現在進行中の2年間にわたるテーマは「持続可能なコミュニティと環境の促進」であるため、これを意識し、本会議は「周縁化から持続可能なコミュニティと環境へ」という題の下で展開した。その中で、英国ソーシャルワーカー協会が4月に行ったデモ行進に関する報告が印象的で、社会福祉サービス利用者に悪影響を及ぼす公的予算の削減に反対するために、バーミンガムからリヴァプールまで100マイルを歩いたということである。この取り組みは、今回の国際会議の精神のみでなく、リーマンショック後に各国政府が進めている緊縮財政政策に対してヨーロッパの社会福祉業界が奮闘している現実をよく表している。

他にも、例えば基調講演を担当する二人のうち一人はいわゆる「グリーン・ソーシャルワーク」を提唱した学者で、気候変動の問題において求められるソーシャルワー

クの役割に関する演説を行った。さらに、分科会レベルでは、持続可能な開発目標（SDGs）に関するワークショップや発表が複数あった。国連が定めた本枠組みは、開発途上国の貧困問題を中心課題として扱ってきたミレニアム開発目標（MDGs）に替わる新たな15ヶ年計画で、相互依存関係に対する現状認識を踏まえ、先進国を含めた全世界による主体的な取り組みを通じて、より持続可能な開発体制の実現が主軸となっている。



気候変動に関する基調講演

また、先住民ほどでないとはいえ、今回の両訪問国も再生可能なエネルギーなどの持続可能な政策に力を入れている良いモデルを提供していると感じた。フィンランドの木材利用やアイスランドの地熱発電などがその良い例である。

最後に、このような機会を与えて頂き、心より感謝の意を表したい。



アイヌ彫刻家の床ヌブリ氏によるサンタクロース  
をイメージした寄贈作品